

共通テストを見据えたリスニングの指導方法： Before/While/After Listening のサブスキルの豊富化

巨理 陽一

1. はじめに

英語授業の学びは、(a)うまくやりたかったができなかったこと(伸びしろ, NEED), (b)他者から学んだこと(まねび, SHARE), (c)自分ができたこと(手応え, DID-IT)の3つで主に構成されると考えている。この見方に照らして、自身が大学で教えていても高校の授業を参観していても、現状、特に課題が多いと感じるのがリスニング指導である。

なによりまず学習者にとって際立つのは、その「難しさ」である。断片的な聞き取りから授業者が手応えを与えようとしても、リスニングの活動は、全体として「聞き取れなかった」という思いの実感のほうが勝ってしまいがちである。特にやり取りに伴う(双方向)リスニングではない場合、理解を確認・調整しながら聞くことができず、聞いている際の負荷がいつそう高まる。そこで確実な聞き取りを保証するために繰り返し聞いてもらおうとすると、それだけ時間を要し、音源が長くなればなるほど学習者は集中を維持するのが難しく、次第に退屈さを感じてしまう。

授業においてリスニングの学習過程を楽しくすることは容易ではないが、少しでも学習者が手応えを実感できるものにする上で上記の状況の改善を図りたい。本稿では、その鍵がサブスキルの豊富化にあるということを、大学入学共通テスト平成30年度試行調査(以下、H30 試行調査)の問題を具体例に解説する。

2. 聞く前にできること

高校の授業を参観していると、教科書を閉じさせたり開かせたりして、いきなり音源を聞かせる様子を見ることが多い。もったいないと言うより他ない。学習者の立場から言えばあまりにも酷である(外国語であれ母語であれ、今までの人生で、なんの構えもなしに話しかけられて「え?」と聞き返したこと

がないか自問してみるとよい)。学習者が既にその話題について知悉しているならともかく、これから知るべき内容をなんの準備も構えもなしに、しかも外国語である英語で、漫然と聞かせてその理解を期待するというのは、非効率的であるだけでなく、実際の英語使用とも合っていない。

現実に出くわす一方方向リスニングを考えると、母語であれ外国語であれ、聞き手は例えば天気予報を聞くと意識を向けて聞くのであって、「なにについて話すかわからないがとにかく聞いてみよう」という場面はあまりない。特に目的なくテレビやラジオを流し聞くこともないわけではないが、少なくとも聞き手はその音声を聞き続けることを選択しており、自分に関心ある話題が話されているとわかれば以降は集中して聞くだろう。駅や空港でのアナウンスのように、重要な伝達事項であれば話し手が聴衆に向けて注意を促すぐらいなのである。もちろん学習者には、英語の授業を受けているという構えはあるし、これからいつものように英文を聞く(し、それがきつと「リスニング」というやつな)のだという意識もあるだろう。しかし、学習活動の一環として聞かせるからには、聞くための足場をもっと積極的かつ周到に指導過程に用意すべきである。

例えば、H30 試行調査第4問Aの問1を見てみよう。まずは、この4コマでどのような話が展開されそうかを予測し、ペアやグループで英語で共有してもらいたい【predicting】。ここで英語での話し合いを求めるのは単に英語の授業だからということではない。話の展開とともに、この後の音声で聞くことになるであろう語句をどれくらい具体的に思い浮かべられるかが聴解に直接の影響を与えらるからである。「おばあさんが玄関のドアを開けた拍子に飼い猫が逃げて、家族で探すも見つからず玄関前に餌を置いておいたのだが、茂みの陰から鳴き声がして見つかった」と日本語で筋を語るだけ

問 1 女の子がペットの猫(サクラ)について話しています。話を聞き、その内容を表したイラスト(①-④)を、聞こえてくる順番に並べなさい。

16 → 17 → 18 → 19

〔「大学入学共通テスト」試行調査(平成30年11月実施分)第4問A問1〕

でもこの問題にはたまたま正解するかもしれないが、英語のリスニングができたことにはならない。ここで、a cat (ran out)は当然のこと、opened the (front) door, search や look for, (placed) food, (behind the) bushes といった表現がどの程度浮かぶかを学習者は試しておくともよいし、予想を聞く中で教師も折に触れてその力を把握しておきたい。

次に、問題を概観し、指示文からわかることをおさえてもらいたい【previewing】。先生方は驚くかもしれないが、ろくに指示文を読みもせずとにかく解こうとする学習者は意外に多い。それは、学習者が不真面目だからというよりも、問題や指示文から得られる手がかりが聴解に役立つと思っていないことによる(「問題の先読み」というテクニックを活用するためにもある程度の経験や能力が求められることを想起されたい)。指示文を読んでいる学習者でも、漫然と読んでいる場合は少なくなく、そこから有益な情報をくみ出しているとは限らない。だからこそリスニング指導においては、誰がなにについて話すのかといった状況・文脈を把握するための問いを、音声を聞く前に投げかけ、問題の見方を伝える必要がある。第4問A問1の場合、まさに指示文の冒頭に書かれていることであるが、女の子が猫について話しているのであって、語り手はおばあさんでも猫でもない。したがって、冒頭の opened the front door の主語として I が聞こえることはないし、最後のイラストは I enjoyed sniffing around the bushes. といった話ではなさそうだと予想できる。

聞く前にできることにこれだけの紙幅を割くのは、現状の指導にそれが圧倒的に不足しているように思われるからである。さらに、周知の通り大学入試センター試験の英語リスニングと異なり、H30 試行調査は第4問以降の音源が流れるのは1度のみである。だからこそ聞く前にできることの役割はいっそう重要となる。ここで紹介した【predicting】と【previewing】の効果は、有り無しで同程度の長さや語彙の音源を聞いてみれば、学習者にもすぐに実感できる。リスニング指導の改善は、音を聞いている最中だけが「リスニング」だと思っている意識を変えることから始まると言ってもよい。

3. 聞いている間と次に聞くまでにできること

いよいよ実際に音源を聞く際、どのような指示を学習者に出すだろうか。聞こえてくる順序にイラストの番号を選ぶというのが本問で求められている作業だが、選択自体は音声に関係なくできてしまうこともあり、もっと学習者がねらいを持って音声にフォーカスする手助けをしたい。

例えば、前述の【predicting】と対応させて、「各イラストに対して、自分の予測が正しいということを書けるキーワードを書き取ってみよう」と求めることができる。聞いている最中にメモを取るよう求めた授業場面を参観していると、速記者でもないのに、聞こえた英文を頭から Last Saturday, when my grandmother opened the front door of our house, our family cat, Sakura, ran out to chase a bird. …と書こうする学習者が少なからずいる(実際はだんだん歯抜けの状態になっていくとしても)。時系列の展開の場合、last Saturday は重要な情報となる可能性があるが、少なくとも my grandmother の my はここで書き取る必要はない。むしろ、my や our 以外だったときのほうがその価値のある情報と言えるだろう。

要するに grandmother, (opened) front door, cat, ran out さえキャッチできていれば、それが③のイラストを指していることは特定できる(最低限なら cat, ran out だけでもよい)。According to her talk, for what did the cat run out from her house? のような情報の要求がない限り、猫が逃げた理由はここでは重要ではない。様々な聞き方を意識的に経験することを通じて、自分のメモの精度と

照らし合わせながら、そうした、聞き取りの目的に応じた内容語と機能語、概括的(general)情報と詳細(specific)情報の見極めの知識・技能を少しずつ磨いていく必要がある。少なくとも授業においては、問題の正否以上に、そこにどうたどり着いたか(を教師が把握し、次につなげること)が重要なのである。

そのために、時間が許す限り丁寧に、並べかえたイラストを順に訊きながら、その根拠としてそれぞれが書き取ったメモを全体で共有したい。学習者から(our family) cat, ran out が出てくれば OK で、その学習者が grandmother, (opened) front door まで拾えるようになるために、追い質問で when did it happen? と問うことができる(無論イラストを描写するのではなく、なんと saying it を問うものとして)。そこまでキャッチできている者が他にいれば出してもらえばよいし、教室内の誰も聞き取れていなければ2度目のリスニングの前に再度問いを投げて聞いてもらえばよい。仮に ran out も学習者から出てこなかったとすれば、『猫が家から飛び出して行った』と言うために彼女はなんと saying it か」と問うてもう1度聞いてもらう必要があるだろう。文中の空欄の単語を穴埋めするような問題であればそれ自体が聞くべき場所の誘導にもなり得る。しかし概要や要点の把握が求められるリスニングにおいては、そもそも概要や要点とはなんなのかを学習者が最初から理解しているわけではないし、具体例を通じて少しずつその理解の精度を上げていかねばならない。教師の発問はその重要な足場になるということである。

キーワードの書き取りに限らず、音声を聞いた後の教室でのこうしたやり取りで気をつけたいのは、教師が答えを言っておわりにしたり、板書やスライドなどでスクリプトを見せるだけにしたりしないことである。当該の音声を通じて確かに言っていたと学習者が実感しない限り、聞き取れなかったものが聞き取れるようになったことにはならない。仮に学習者自身からスクリプト通りの英語が出てきたとしても、もとの音声で確認すべきである。スクリプトを先に示すと多くの学習者は聞くより先にそれを読んでしまうので、まず音声のみで聞く(この点で、教科書の導入時に本文を見ながら聞かせても、ほとんど「リスニング」にはなっていない場合が多い)。その後でスクリプトと対応させ、音声で形式を確認

するステップももちろん重要である。




したがって、必然的に音声を繰り返し再生することが求められるが、冒頭で指摘した通り、毎回頭から再生すると時間を食うし、学習者には聞くべきポイントがわかりにくくなってしまふ。再生開始位置を任意に複数設定できる audipo(詳しくは <https://appleshinja.com/audipo-usage> などを参照されたい)のようなアプリを活用して、(I) placed food and water や behind the bushes (I) heard a soft “meow” などをピンポイントで繰り返す。時間に余裕があれば、スクリプトと対応させて通して聞くともよいだろう。

次に、H30 試行調査第4問 A の問2を見てみよう。問題と問題の間に用意された約30秒を利用して、2節で解説したように状況・文脈をおさえる。選択肢や空欄からも、旅行代理店の人がこれから説明する各ツアーの料金が重要な情報だとわかる。

答えとして聞き取るべきはその詳細だが、ここではあえて、「説明の中で最も重要な1文はなにか」と投げかけて聞いてもらいたい。この問いの解説は、繰り返し聞いて料金がすべて埋まってから、再度投げかけて音声を聞き、スクリプトを見ながらでもよい。実際、学習者の多くがこの問いの意図に気づき、重要性に納得するのはその段階になるだろう。しか

問2 あなたは海外インターンシップで旅行代理店の手伝いをしています。ツアーの料金についての説明を聞き、下の表の四つの空欄 20 ~ 23 にあてはめるのに最も適切なものを、五つの選択肢(①~⑤)のうちから一つずつ選びなさい。選択肢は2回以上使ってもかまいません。

- ① \$50 ② \$70 ③ \$100 ④ \$150 ⑤ \$200

Tour		Time (minutes)	Price
 Hiking	Course A	30	20
	Course B	80	21
 Picnicking	Course C	60	
	Course D	90	22
 Mountain Climbing	Course E	120	23
	Course F	300	

し、後から意識するより、最初に聞く際からこの視点を持っておいたほうがよい。

冒頭2文は状況の説明で、旅行代理店の人が問題に掲載されたリストを持ち出し、作業の手伝いを依頼する発話である。つまり(指示文が存在しない現実の英語使用状況では聞き取ることがかなり重要な部分だとしても)【previewing】で了解できていれば細かく聞く必要がなく、「『手伝って』みたいなことを言っているのだ」とわかりさえすればよい。最も重要な1文は、それに続く *The prices depend on how long each tour is.* という料金設定原理の説明である。この概括的情報を聞き取って意味が理解できれば、ツアーの内容やコースの別は料金に関係がなく、所要時間のみによって料金が決まるということがわかる。そのような雑な仕組みで経営的に大丈夫なのか心配にならなくもないが、scanningすべき詳細情報が焦点化されれば、リスニングはかなり容易になる。仮に聞き漏らした箇所があったとしても、推測で補いやすくなるだろう。

リスニングに限らないことではあるが、general to specific という英語の談話構成の基本原則に学習者が独力で気づくのは難しい。だからこそ、それが理解の鍵となるリスニングの活動の際に、教師が問いかけ、そういった構造のスキーマを導入していくことが肝要なのである。ジャンルごとの典型的パラグラフ構造を知っておくことも、リーディングや他の技能と同様、極めて有効である。再度聞く前に、あるいはスクリプトと対応させて確認する際に(例えば H30 試行調査第5問のような音声について)ディスプレイコース・マーカーに注目することで、それがいかに効果的に用いられているかを吟味することができるし、学習者が話したり書いたりする際に活かされることも期待できるだろう。

4. リスニング指導の今後に向けて

本稿では、H30 試行調査の問題を授業で扱う指導過程を例に、聞く前、聞く際、そして聞いた後、あるいはもう1度聞く前にできること(リスニングのサブスキル)を紹介してきた。

リスニングが、一つひとつの(語句や音素の)音の認知によるボトムアップの過程だけでなく、その話題や英語の構造・使い方についての先行知識の活用によるトップダウンの過程の両方から成り立つもの

である以上(Vandergrift & Goh, 2012, 26-27)、当てもなく繰り返し聞かせて単語を拾わせるだけでは学習者が手応えを実感できるリスニング指導は及びもつかない。その意味で問われているのは、学習者が教科書や試験で出会うリスニングの過程を分析的に検討する教師の知識・技能と、それに適した指導の引き出しである。

留学などの生活経験を通じて聞けるようになった英語教師は、相手がなにを言っているか聞き取れず苦勞した日々をどうにかして思い出してほしい。反応を見て相手が繰り返したり言い直したりしてくれたあのときの双方向リスニングの特徴は、学習者が授業や試験で出会う一方方向リスニングには欠けていることを想起しよう。自分もアナウンスや講義が聞き取れなければ誰かに助けを求めたはずである。ラジオやリスニング教材を通じた血のにじむような練習によって聞く力を鍛えた英語教師は、多くの学習者はそこまで粘り強くも動機づけられてもいないことを肝に銘じよう。意味があると信じて毎日の素振りをきちんと続けるには、経験と知識に裏打ちされた強靱な意志が求められる。逆を言えば、好きな音楽や映画などが見つければ、学習者は放っておいても覚えるくらい繰り返し聞こうとするだろう。教材や試験に果たしてそれほどの内容があるだろうか。

少なくとも、今求められているリスニングの力に對して、日本語の意味が書かれた単語のリストをむやみに配って暗唱・暗記させるような指導の効果が薄いことは明らかなように思われる。「private: (形)個人用の」といった指導をいくら続けても、H30 試行調査第4問B問1のように「共用スペース」や「個室」といった条件にかかわる内容が様々な表現で登場するリスニングに歯が立たないからである。リスニング以外の普通の授業の活動やパフォーマンス課題がリスニングの伸びしろと手応えにつながるものとなっているかを改めて見直すことも、リスニング指導のために必要な作業と言えるだろう。

参考文献

Vandergrift, L., & Goh, C. C. M. (2012). *Teaching and Learning Second Language Listening*. New York, NY: Routledge.

(静岡大学 准教授)